

昭和二十四年七月二十三日
 第三種郵便物認可
 行(毎月一回・十五日発行)

(通三二四号)

慈

光

第二十八卷

第六号

次

目

善 惡 超 絶 の 真 義……………	近 角 常 観……………	(1)
人 生 問 題 と 信 仰 ③……………	福 島 政 雄……………	(4)
福 島 先 生 を 偲 ん で (続)……………	宮 地 廓 慧……………	(8)
一 道 会 の 記……………	榊 原 徳 草……………	(11)
誓 願 不 思 議 に た す け ら れ る ば か り……………	松 村 繁 雄……………	(15)
念 仏 詩 抄……………	木 村 無 相……………	(17)
往 生 は 一 人 々 々 の し の ぎ……………	花 田 正 夫……………	(20)

善悪超絶の真義

近 角 常 観

一 他力救済の大本

『歎異抄』の十三章の中に「人を千人殺してんや」ということがある。これは如何にもでまかせに云われた言葉のようで、こんなことを云って人が聞き違いせぬであろうかと色々自分にも考えたことがあるが、これは昔インドに、ある外道があつてその上足の弟子にエンクツマというのがいた。その外道があることでその弟子を憎み、何とかしてこれを殺そうとして、わざと邪法を教え「人を千人殺して来い、然らば汝は悟りに入ることが出来る」と云った。するとエンクツマは非常に喜んで、師匠の仰せに従つて、街道に出て九百九十九人を殺して、今一人で千人になろうとする時に仏に出遇つて、仏を殺そうとして、かえつてその間違いを教えられ、慚愧して救われたという話がある。そこで親鸞聖人が、人から云いつけられて、その通りにするせぬ、それも自分の思い通りにまかせぬのだという例にこれを引かれたのである。要するに一分一厘も自分の思い通りにならぬということである。世間でも一分間のことで機会を逸したということがある。僅か一分間のところで死に

い気の毒だから助けてやろう、危険を犯しても助けてやらなくてはならぬ、動けぬのが哀れであるから動かさせてやろうという慈悲心の発動があるのである。

吾々の善悪に従つて、善は取りあげ、悪は憎しとするのが世間普通の道徳上の教である。然しそれでは救いにはならぬ。何人も苦しんでいるのは、善くしようとして善く行かず、悪は避けようと欲して悪に落ちてゆくことである。その何とも仕様のない、動きのとれぬ身の上であるから無理はない、そこを見た上は最早や善悪に問題はないのである。そこを動かして、動けぬ者を飽くまでたすけてやろうというのが仏の願である。

三 真実の同情

すると何も彼もみな業報で、思うようにならぬだけじゃないかという、そうではない。我々がかく業報に繋かれ、電車道に横つて動けないのが可哀想であるということを見抜いて下さった上は「動かねば助からぬ身であるのに動けぬとは可哀想であると、それを見た上は、その汝を何処までも見捨てはせぬ」と、吾々の普通の善悪の所作が、ことごとく業報であることを哀れんで下さった上の慈悲だから何処までも善悪を超越した真実で迎えて下さるのである。ところが、これを聞き間違つて「我々の善悪はどちらでもよいのだ」ということになつてはならぬ。善悪は何処まで

目に遇つたという方は、これは遇うべき縁があつたから遇えたので、一分一厘も吾々の思う通りには行かないものである。ここが信仰の上で最も大切なところである。そこを見て下されたのが他力救済の本願のおこる所である。

二 動かれぬ身

今これを卑近な譬でいうと、電車の軌道に人が横たわつて倒れていたとする。これを見た者はあぶなくて「そこを退け」と叫ぶ。然し倒れている人に歩けるだけの力があればそうすることも出来よう。ところが車掌や通行人がどんなに怒鳴つても動ぬので、よく見ると腰が抜けていて動かれぬのであるとわかると、動かれぬ者に、動かれぬのがいかぬと云つても駄目である。当人も通りたいのであるが、動けないで困っているのである。

するとそれを見た者が「もはや彼奴は何程云つてやつても動かれぬからいかぬ」ということはなくなってくる。「成程動けぬのか、動けぬとすれば気の毒だ」となつて来る。いよいよ気の毒となれば電車の来るままにほつてはおけな

も大切な問題である。けれどもその為さねばならぬ善悪が、そのように出来なということである。借りた金なれば返さなければならぬ。しかしその返さなければならぬ金が事實は返し得ないという問題である。「返せない」と「返さない」とは大違いである。「返せぬのだから返さなくてもよいのだ」では意味をなさぬ。

すると返すべき金が返せないことになると思ひ方である。けれどもその心を見抜いてくれた人は「それは成程返さなくてはいかぬが原則である。けれどもそのせねばならぬが出来ぬとはさてさて気の毒である、故に我はそこを何処までも見てやる」という広大な同情があらわれるのが他力の救済である。

四 破闇満願

ところが仏の本願は「悪しきなりで救われる」というので、多くの信者は「悪くてもよいか!」と「悪くても済まぬから、善くしなくてはならぬ」という二種類の考えになつている。こうなるのはなお自分で動くことが出来る余地があるものとなつているからである。ところがあつてならぬ悪しきが止まぬということになると、悪くてもよいでは安心出来ぬ。然し何程つとめてもその悪しきがとれぬとなると「我は悪がやまぬのを何処までもお見捨て下さらぬところの御同情である。善きも悪しきもして見ようのないの

を何処までもやる瀬ない御真実の慈悲一つに夜を明けさせて貰うのである」。即ち『歎異鈔』の第一章に

本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに、悪をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに。

とあり、また『口伝鈔』には

それがしはまたく善もほしからず、まれ悪もおそれなし。善のほしからざる故は彌陀の本願を信受するにまされる善なきゆえに、悪のおそれなきというは、彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに。

とあるが如く。唯あるは仏の本願、恵み、親心、真実のみである。このほかに「こうなったら、あんなだったら」というも、この恵み以上の善なるものはあり得ないのである。われわれの善いと思っていることには、やがて必ずまた悪があらわれて、我々の善には限界がある相對の善である。むしろ私共の善くなり得ないのを見て下さる仏の恵みをいただくこと、これ一つが最も善いとなるのである。たとえば一度太陽が東の空に昇ると、諸星のすべてが光を没して唯太陽のみ明らかになるように、この世の善し悪しはすべて意味を失って、唯仏の慈悲の光明ばかりがありがたいものとなる。これが破闇満願である、一切の闇が破られ、一切の志願が満足されるのである。『法蔵』より。

人生問題と信仰(三)

四、親心

この時、そこに小細工をしようとする者が五六人も出て来て屁理窟を云うのである。アジャセ王は、五逆罪をおかせば生きながら地獄に墜ちると聞いて、自分は今にも地獄におちるであろうに苦しんでいる。そこに次々と大臣が出て来て種々な理窟を述べて慰めようとするのであります。

一人は曰く、「大王は地獄におちると苦しんで居られるが、そんな地獄なんかありません。誰かその地獄を見て来たものがありますか誰もないでしょう。それは地獄がないからであります。私の先生に非常な名医があつてその先生は——一体、業報などあるわけのものではない。あるように考えるのが間違ひである。黒業なければ黒業の報はない、白業もなければ白業の報もない」と説いて居りますと言つて慰めるのである。

又、或る一人の家来が来た時、アジャセ王は「自分は体も心も痛んで苦しむ。自分は痴盲であつて悪友に近づき、正しい道の父親を殺した。父母や仏弟子に対して悪業を犯し

近角先生御法話

空の袋を出されてのお示し

我々はうつろな心を何とか満たそうとして、物に人に求め求めてさまようけれど、何時までたつてもうつろは満たされぬ。信仰上のことでもその通りで、何とかして信心を得たい、よろこびたい、よくなりしたい、しっかりしたいと求め廻るけれど駄目である。

ところが仏のお救いは、そういう何処まで行つても、どんなにしても満たされることのない空(から)っぽの心を見抜かれて、その空(から)の袋の底から、可愛想である、不憫であると、無限に慈悲をそそいで下さる。それは袋の底の方から逆に仏のまことをもって満たして下さるのである。

向うにあると思うた光が、うしろからドツと輝いて下さる。飢え渴いた者が、前方に一杯の水を求めて、その得られないことをなげき悲しんでいる者に、後方から思いもかけず沢山の水が押し寄せて来たのと同様である。

この如来廻向とは、我々の求める方向とは逆である。

(柳瀬留治先生より伝聞)

福島 政雄

たならば、必ず阿鼻地獄におちると聞いていたので、今こんなに苦しみを悩んでいる。これを救済する医者はなからうか？」と痛切な悩みを訴えるのである。すると大臣は「一体、出家の法と王法とは違うのであつて、出家は一匹の蟻を殺しても罪になるが、王法では、一國の王は父母を殺しても罪にはならぬ。故に王法と出家の法と区別してお考えにならねばならぬ」と云う。それでもアジャセは肯くことが出来ないのである。

又次の大臣が出てたずねると、王は前のように自分の苦しみを訴えるのである。「わが父は非常に情深いお方であつた。占師が自分を占つて、この子は大きくなつたならば父を殺す、と云つた。然るに父は、その私を育てて下さつたのである。それに私はその情深い父を殺してしまつた。こんな者は阿鼻地獄に墜ちるに決つてゐる。それで自分はこんなに苦しんでいる」と云うと、その大臣は「人間には前世の悪業の余りがあります。前生の余業で生死をうける事になります。御父上ピンバシヤ王も、前の世の余業で

この世を終ったのであるから、大王の罪ではありません」
かく次から次へとすすめて、理窟でアジャセ王を慰めようとしています。或る大臣の如きは非常に理窟を述べる。

「一体、地獄々と云われるが、その地獄の説明をしましう。大とは大地で、獄は破るという意味であるから、地獄を破ることであつて、つまり地獄は無いことになるのである。罪報は無いのである。又地は人間の人、獄は天上界の天の意で、父を殺したために、人間や天上界に生れる果報をうけることになるのであります。羊を殺して羊界に生れ、人間を殺せば人間や天上界に生れると聞いて居ります。又地獄の地は命、獄は長いという意味で、殺すことによって命長くこの世に生活することになる。大王よ、決して大王の言われるような地獄はないのである。麦の種を播けば麦を生ずる、稲をうゑれば米が生ずる。人を殺したら人に生れる。というようなものであります」とて王を理窟で慰めようとするが、王はそれでは慰められぬ、理窟では王の心は少しも落ちつかないであります。

今一人の大臣は「一体、殺すということに、本当に罪があるであろうか。斧が樹を切つても斧に罪はない、鎌が草を切るが鎌に罪はない、刀が人を殺しても刀に罪はない。毒をもつて殺しても毒に罪はない、一切万物決して罪はない。大王にはちつとも罪はないではありませんか」と理窟

い。これを治す何ものもないであらう」と訴えるのであります。

その時、耆婆は「善い哉、善い哉」と大王を賞める、そして「大王は罪をお造りになった、それは仕方がない。然し、今大王の心には、非常な後悔と慚愧の心をおこしになつて居られます。諸仏世尊はことに、二つの正しい道があつて、これで一切衆生は助かるのであると云われて居ります。それは、一には慚であり、二には愧である。慚は自ら罪を造らない、愧は人に罪を造らせない。慚は自己に恥じ、愧は世間に恥じる。慚は人に恥じ、愧は天に恥じ、愧は世間に恥じる。慚は人に恥じ、愧は天に恥じ、これを慚愧といい、無慚愧は人ではない畜生であると。この慚愧が人間に一番大切である。大王は今、この慚愧の心を起して居られます。大王は、この病を治す人は無いと云われますが、それを治す唯一人のお方がある。カピラ城の浄飯王の王子シツタルタ太子はおさとりを開かれて居ります。この仏世尊のお力によつて、かならず大王は救われ給うでありますしう」と云つて、釈尊の御許にまいられるように勧めて居る時、天上より声が響いて「自分は今汝を慰むが故に勧め導くのである」と云う。耆婆は、仏世尊よりほかに大王を救う人はないと説き、空からは、汝を慰むからその道を勧めるのであると喚ぶ。アジャセは非常に怖れブルブ

つくめに落ちつかせようとするが駄目でありました。

これは印度で三千年前の物語りでありますが、この大臣たちがアジャセ王に言っていることは、そのまま今日の人が言つて居ることである。何か人が苦しんでいる時、理窟でもつて慰めようとする。何とかして人生問題の悩みを理窟で誤聞化そうと私どもはしています。併し、人生問題そのものの苦しみは、理窟でどうにもなるものではない。

理窟を開けば益々苦しみは深くなつてゆくばかりであります。つまり私どもの人生問題の苦しみが大きくなれば、哲学などではその苦悩が解けるものではない。西洋の哲学、仏教の哲理、唯識論や華嚴、天台の教理などで、身につまされる人生問題が解けるものではないのであります。

そうするとこの問題はどこから解けるか——ここにいよいよ最後にあらわれたのは、耆婆大臣であります。

耆婆は「大王、あなたは安眠ができますか」とたずねる。アジャセ王「耆婆よ、自分の病氣は非常に重い。法の如く国を治めた正しいわが父を横ざまに逆害したから、どんな良医でも、どんな妙薬でも、どんな呪術でも、自分のこの病は本復はむつかしいと思う。昔、賢い人からこんなことを聞いた——その人の身と口と意とに悪業を作れば、その人は必ず地獄におちると。自分は今、どうなつてゆくかを考えると、どんなに慰められても安眠することは出来な

ルふるえて、空から聞える声はたい誰の声であるかとたずねると又空から声が響いて「我は汝が父頻婆娑羅である。汝は耆婆の云うことを聞け、邪見な他の臣下の言うことを聞くな」と。ここにアジャセ王は悶絶して地に倒れる……。

私は、これを非常に味い深いことであると感じて居るのであります。空中から声が響いたということは、これは父頻婆娑羅王の生前の聲が、始めてアジャセ王に響いたこととあります。母親から静かに看護せられていた阿闍世王の胸に、ありありと父の世にあったさまがはっきり甦つてきたのである。外から母の看護、内からは父の聲が響いて、始めて釈尊の膝許へ往こうとなるのであります。もう一歩突込んで申しますと、この世を去つた父親、この世にあつて黙つて看護してくれる母親に促されて、アジャセ王が、釈尊の許へ行こうというのは、アジャセ王にこの時すでに久遠の聲が聞えてきた、ということになるのであります。

これは単にアジャセ王の問題ではない。私自身にそんなことを感ずるのであります。両親がこの世に在った頃はしきりに父親にたてつき、毒矢を向けて来たのである。私がか家を持たうとした時、母は非常に心配して東京まで来て一心に世話をしてくれました。私は有難くない事はないが、一向に感謝しないのでありました。久しぶりに遙々と母親が来たのですから嬉しいにはちがいないが、何かと隔て

心があつて打ち融けない。自分自身でも満足しないし、と
いて、友人にも余り打ち融けて話しなならず、いい加減
なことを話していました。或る日、夜遅く帰って、仏壇に
灯明をあげてその前に座って大無量寿經の五惡段を開いて
見ますと……この世の中にわからぬ人間が居る。それは大変
な怠け者で、自分の仕事は励げまない、その眷属は飢え凍
える有様で、父母が見るに見かねて、もうすこし家業に立
ちかえつてはどうか、と意見すると、その子は眼をむき出
して怒って口答えをする。故に産みの親子でありながら仇
同志のようで、こんな子は無い方がよい、と思うようにな
る……。その時、それを読んで、これはたしかに私のこと
であると感したのであります。

又「善人は善い事を行って明るい世界から明るい世界に
行く。悪人は悪い事を行って暗い世界から暗い世界に行
く。誰も知らないであろうが、仏のみはこれをよくしろし
めすのである」という。これを読んで、これは私の事を書
いてあると感じて仏前に泣き伏したのであります。その時
から自分の心が開け始めたのである。今日これを考えます
れば、母はこの子を何とかして正しい道に生きさせよう
と、熊本から東京まではるばる三百里を上って来て私と一
緒に苦しんでくれたのである。私が淋しそうにしてい
るとどこどこまでも理解してやりたいと、黙って誠をつく

福島政雄先生を偲んで(続)

七 愛国心と先生

終戦後、幾年か経ったあるとき、先生から次のような逸
話を承ったことがある。

戦争もまだ酣(たけなわ)の頃、大阪岸和田の某中学校
の校長から先生に講演の依頼があった。京都に住んでおら
れた先生は、早速引き受けて趣かれ「大教育者釈迦牟尼」
という題で講演せられた。ところがその校長先生は、当時
軍国主義の一翼であった八幡公会の有力メンバーだった
そうで、先生がまだ降壇されないうちに、

「釈迦という人物は、祖国が滅亡しようとしているとき
に、親戚の木蔭は涼しい」などとうそぶいて、祖国の
滅亡を見送ったというじゃありませんか？そんな愛国心
のない人間が、どうして「大教育者」などといえましょ
う？」

と、先生の論旨に激しく反駁した。先生は、

「じゃ、この際どうしたら「愛国者」といえますか？」
と問い返えされると、校長はいよいよ意気込んで

してついで来てくれたのである。五十五年間の母の生活を
今からかえりみるに、その時の私は一種のアジャセ王であ
り、母は韋提希夫人であった。苦しみの中に子に対する務
めを沈黙裡に果している、その真実心は、今すでに母がこ
の世に無い時に振りかえってみれば、その母を通しての久
遠の御親のまことであった。私は生きた仏の説法を聞かさ
れたのである。空な仏ではない、活きた仏、活きたまこと
に生かされはぐくまれている、私と一緒に悲しみ、私が迷
えば共に迷い、共に居て下さる廣大無辺のお慈悲が、私の
上に生きている親を通して響いてくるのであります。

それではお前は、いつもそんなに親のお慈悲を感じてい
るか、と云われると、私はかねては念仏を申さず、親をも
思わない。そのような私をどこどこまでも慇懃で、久遠の
親心のまことは、その私の生命と一つになって、私の生命
の上に徹して下さるのであります。

韋提希夫人が、空中から聞こえる父親の声に悶絶するア
ジャセ王を見て、静かに葉を塗っているのは、三千年昔の
他所の問題ではなく私の身の上の問題である。母はつねに
この私の生命と一つになって動いているのであります。

どこどこまでも私を理解し、私の生命と一つになって生
きて居るので、それは説法する母でなく、共に苦しみ悲し
むその親の血の涙の苦しみを通じて、そこに、私の生かさ
れる御恩をいただくのであります。(続)

宮 地 廓 慧

「死ぬまで闘うんですよ！ 一死以って国に報ゆるのが
△愛国心△じゃありませんか！」

という。そこで先生は、

「死ぬことだけが△愛国心△じゃありません！」

と、毅然として答えられた。すると校長は、

「そんな言葉を聞くと、私は胸があげてきそうです！」
といって、ドアを蹴って去っていったとのことである。

さて、それから数年経った終戦後のあるとき、東京に移
っておられた先生の許(もと)に、一通の講演依頼の手紙
が届いた。みるとさきの校長先生からだった。先生は特別
に時間をこしらえて岸和田まで出向かれた。控室で待つて
いられると、その校長先生は、這入(はい) ってくるや否
や、テーブルに額(ひたい)をすりつけていわれた――

「先生！あの節は失礼なことを申しましてお恥かしうご
ざいます。日本は負けても私はこうしてまだ死なずに生
きております！」

先生の両眼には勿論熱い涙がたまっていたことであらう

八 意志の人

この話は、今日の私共にもなお教えるものが多い。なるほど八軍国主義的愛国心Vは清算せられたかも知れないが、これに代るにハイデオロギー的エゴイズムVは、なお狂暴を極め、権力獲得のためには、醜い黨利黨略はあつても国民あることを知らない、あの集团的エゴイズムの跋扈（ばつこ）は、一元的か多元的かの相異はあれ、結局は戦争当時のあの八狂乱状況Vと何ら異ならないのではなからうか？いや、似而非（にてひ）なる八民主主義デモクラシーVにカバーされているだけに、一層に厄介な八混沌迷地獄Vといえよう。

亡びゆく祖国を前にして、

「目連よ、汝の偉大な通力を以ってしても、蒔いた種子の結果をまぬがれることはできない！」

といって、祖国の運命を悲歎せられたお釈迦様の澄み徹った知性と心情の中にこそ、国家民族の興隆の原動力が秘められていることを見逃してはならない。国家や民族が、その本来あるべき道理——八法Vに契（かな）わない限り、国家民族の衰頹はまぬかれない。そのあるべき相（すがた）を教えていて下さるものこそまさに八仏陀Vであり、八浄土Vであり、八仏教Vである。先生が、「死ぬることだけが八愛国Vじゃありません。」といつて、大教育者釈

も、静かにその運命に忍従しつつかもこれを超えてゆかれたところに、これら両先生の八いのちの置きどころVが世間の人たちとちがつておられることが知られる。特に福島先生の場合は、先生の経済生活の殆んどが、大谷大学教職の一つにかかつていたとお察しするが故に、この追放はたしかに大きな打撃であつたことが想像される。先生ご晩年のご生活、多くの病弱ご家族をかかえられてのご苦労の第一歩はこの八追放Vにあつたと申してもよいのではなからうか？その意味においては、先生はまさに八戦争犠牲者Vの一人であつた。

しかし私は思う、そして敢えてこれを申したい、八敗戦日本Vの悲運を一身の責任と荷負されて、あくまでも八世界人Vとして八世界Vの中に生きる八日本人Vとしての正しい生き方を念じ続けてゆかれた崇高な八菩薩Vの一人がわが福島政雄先生であつた、と。

そしてその精神の原動力、その生命力の根源は、若きとき近角常観先生によって啓（ひら）かれた、あの金剛の信心、八仏の一子・法界の衆生Vとしての確信のほかになかったことに思いを致すとき、私はいまさらながらに、八お念仏Vの強靱（きょうじん）さを見せて下さった先生のお徳に、深い深い敬仰を感じずにはいられない者である。

迦牟尼！と讃仰されたのも、このことを確信しておられたからである。当時の社会状況を知る者であるならば、この先生の一言が、いかに強い八決死の覚悟Vなくしては出せない、八勇者の宣言Vであつたか、よく分つて下さることであらう。一步も世俗に妥協されなかった先生の強い意志と鋭い智慧をそこにみる事ができる。世俗・時流に追隨し易い今日の私共日本国民への、痛烈な頂門（ちようもん）の一針（いっしん）ではなからうか！！

九 仏の一子・法界の衆生

念仏者は、このような強い意志と鋭い批判をもつが故に、とかく世間からは、八非妥協的Vと評され、八頑固者Vと誤解される傾向がある。先生はこの評価を免れなかつたお一人であつたようである。〃世渡りの下手な、世間のことに疎（うと）い、いわば驢介固陋（けんかいこうろう）の人〃と目（もく）されておられたようである。

それからあらぬか、先生は、例の終戦直後のページ（追放）にかかつて大谷大学を追われる身となられた。まことに八世間Vというものは皮肉である。いな〃そらごと・たわごと〃である。戦時中は八戦争反対の非国民Vとも見られた先生が、今度は有力な八戦争協力者Vとして追放されるとは！私の知る範囲では、金子大栄先生も全く同じ処遇をこうむられたお方の一人である。しかしさすが両先生と

追記

この一文を草するに当って、ありし日の先生を、なるべく身近く感ぜさせて頂くために、先生の主要なご著述を座右にして筆をとった。それらの中の数篇・数節を、それとなく拝読するうちに、文字の間ににじみ出ている先生の法悦・法味のご生活そのものが、恰も体温のように私に伝わってくるのを覚え、先生においては、八文字Vと八人V、八言葉Vと八人Vとが、よくよく融け合っていることに、いままさらの如く驚かされたことである。そしてこれを機に、私は、もう一度ご著作の全部をゆっくり拝読したいと念願しているところである。

〔昭和五十一年三月三十一日〕



一道会の記

榊 厚 徳 草

次ぎに岡山大学教授の山田宰先生（先生は池山先生のドイツ語歎異抄をベルリン留学中に有縁の人々に講話されてベルリンの浄土真宗会の基礎を立てられ、後フランス留学中にフランス語歎異抄を出版せられた）のお話の要は左のようでありました。

岡山における山田でございます。前々にこの会に参会しまして、大変感銘深いお話を伺わせて頂きましたので、再びそんな気持ちで参りました。皆様にお話するというようなそんな何物も持ち合せて居りませんが、取りとめのない話になると思います……。

私、名古屋に居りました時に、花田先生のお宅で色々お指導を得ると共に、諸先生方にお目にかかることができ、白井先生、福島先生、榊原先生、亡くなられた松本先生、池山寿夫先生という方々に接し得る機会を恵まれました。池山栄吉先生には直接お教えを受けたことはなく花田先生を通じて池山先生がどういう方であったかを教えて頂いた。

こは実は六高の理科を母体としております。そこは花田先生が学ばれ、池山先生も六高に居られたので、何かその信仰の雰囲気が残っているんじゃないかと思っていました。が、現在はそうした雰囲気はありません。しかし大きな大学に行きますというぬぼれたりしますが、地方の大学では信仰の話などする機会がありませんかと思いました。然しそれと全く違って、矢張り人から先生々と言われますと、どうしても信仰のことなどそつちのけになってしまひ、人にも語り自分も悦ぶというようなことは凡そかけ離れた毎日。その上地方の大学は忙しくて雑用も多い事情もあります。然しそういう中に、不図こういう機会を与えられた幸せを感じると申しますか、「信心浅けれども本願深きが故に、たのめば必ず往生す」、或は親鸞聖人の「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらになし」そういう、それが自分のための念仏であったと頂くようなことであります。

……私、自然科学をやっている関係もありまして、南無阿彌陀仏が有難いなどとは、どうしても信じられない、そういう気持ちをもって居りました。それが歎異抄を読ませて頂いたこと、それが非常に有難いのであります。然しそれを読ませて頂く時が仲々無い、その時に、歎異抄を読むかわりをしてくれるものは何か無いかなって、お念仏が、

たので、いわば孫弟子とでも申せましよう。ただ池山先生のドイツ語の歎異抄を精しく読ませて頂く機会を得まして非常に感じた事がございます。歎異抄のような書物を外国語に訳するということは並大抵のことではないのであります。先生は非常に正確に一字一句おろそかにすることができない、それを通じて池山先生がどんなに信仰の人であったか、どんな一字一句ごまかさないお方であったか、非常に驚かされたわけでありました。外国語訳というのは大変なこと、ヨーロッパのキリスト教で解釈するようなただ有難いという表現になってみたりして、歎異抄の作者の意図するような、信仰の依って出る基（もと）を、よくかみ砕いて現わしてある翻訳というものは池山先生の訳以外に無いのでないか、と思います。そんなわけで、私にとつて池山先生は、本当に、私が先生に直接に接したことのあるような、私自身に迫ってくる方でございます。

たまたま岡山大学に職を奉ずるようになった時大変喜んでわけてございます。岡山大学の理学部に居りますが、こ

南無阿彌陀仏が本当にありがたいという実感が這入ってくる。私はいつでも、人より何か違った所があるんだと自分の中で感じることもある、そしてそれを突き詰めてゆくと、自分にはお念仏の有難さがあるんだ、そういうことであります。まとまりのないお聞き難いことだったと存じます。これで失礼させて頂きます。

次いで、奈良の女高師時代からの、長い法縁を持たれた福本慶子姉のお法味を伺いました、次のようであります。

人生を生きて参り、年をとってきたのですけれど、そこに人間に生れたことを悦ぶと共に、人間に生れたことの生きざまは一体どんなことかというのを考えて見て、もう少し中年の頃は、ばたばたと生きた感じですが、年をとりますと、お前の生きざまはそれは何だと、みっともないではないか。情けないではないか。という風な考えが涌く。だから明日からはと思うが、なさけない生きざまに輪をかけて生けると云った方がよいという、人生はそういうものだ、喜べというても喜べない、情けないじゃないか。そう解りながら明日からそれを改められない。その時、そういう生きざま、そういう者のために意志して下さったお方。若い時に頭の中で情けない生きざまと何とか気づかして

頂く、気づかせて頂くだけではどうにもならないのだけれど、こういう浄住寺さんの御縁に遭わせて頂きますと、子供の項には祖母に連れられて真宗のお話を聞かせて頂き、勉強して志望した学校に入ってからお目にかかることが出来た先生方、花田先生や亡くなられた松本先生など。又この浄住寺さんのお座敷で、私の二十歳そここの頃から、榊原先生やそのお母さんから御馳走頂きながらお指導を頂いた頃のことを思い出されます。今はその頃と違ってきて道々の環境もすっかり変わってしまったけれど、このお座敷は昔とちつとも変わらない。そして自分一人で情けない生きざまを考えている時と違って、色々の先生の教え、その御縁の有難さを一層感じます。

私が池山先生に初めてお会いしたのは奈良の浄教寺さんで、学生時代で、お友達と一緒にお話を聞かせて頂きました。それから度々先生のお宅にも伺いまして教えを頂きましたが、今日の生きざまの何とみつもめないことと省みさせられることとでございます。これで失礼させていただきます。

次ぎに平岡坦先生のお話を誌します。

今日は長崎から我々十名程参って居ります。一道会には五、六年前から毎年参って居ります。そのきっかけを作り

であります。そして昭和三十一年の暮に、どうにもこうにもならんようになりました。そこで島根県の仏法者の川上清吉氏に、正月休みに伺いたいと手紙を出しましたら、長崎には高原憲という先生が居られるからお訪ねせよとのこととです。それで私は内々心にあった高原先生をお訪ねするようになりました。そして仏法のお話というものは、どういふものかということ始めて知ったわけであります。

高原先生は近角先生のお育てを受けたお方であります。私も漸くにして仏法というものに会うことができました。それから約二十年になり、今は六十歳にもなりますが、今日まで聞恩会で細々ながらお話を伺って居る次第でございます。

考えて見ますと池山先生と近角先生は御親交のお方でありまして、毎年こうして一道会に参加して諸先生方と御縁を結ぶにいたりしましたことは不思議であり。遠く宿縁を喜ぶ次第であります。実は最後の信仰心の平安はまだ取りつけていませんが、来年は榊原先生を長崎にお招きして長崎の地に念仏の泉を掘りおこして頂きたいと念願して居る次第であります。

これで先生方並びに諸兄弟のお法味は終わりましたが、続いて毎年のように精進料理の食事になり、机を出したり料

ましたのは、ここに居られる松本毅さんです。私が参りましたのは確か木村無相さんの関係からで、遠く宿縁を喜べとありますことをしみじみ思われます。

実は私、昭和四年から八年迄京都に居りました時は、池山先生ご存命でご活躍中であられ、又東京では近角常観先生御存命中であります。どうしたものか学生時代にはそういうご縁がありませんでした。そして長崎にまいりまして、造船所に勤務して当時兵器製作所がありまして、魚雷を造る工場でした。そこで始めて実社会に出ましたが。どういふことか私は世間の事と咬み合いが悪く、どうも自分の考えることと社会とが食い違いがあつて理解が出来ない、それで非常に苦しみました。長崎では私と同郷の福岡の御出身ですが第一高等学校から九大医学部を出られた、高原憲先生を心の中で内々存じ上げて居りました。

私と同じ工場に勤めて居た横倉廉吉という人が矢張り九大卒業で、その頃近角先生が地方にご講演に來られることがあつたようであります。

私は存じませんでしたが、福岡にお出講の時はお世話をして居られたようであります。彼は私に、近角先生は日常こうであつた、ああであつたと盛んに申しました。それで私も彼の情熱によって熱心にそれを聞いたように覚えています。然しその方からの話ではどうしても解らなかつたの

理を運んだり一時ざわめきの声が湧き、今までの緊張から解放されて、なごやかな和らぎの満ちた集いとなりました。

毎月の静坐会の人々やその他の法友達によつて御給仕されて、食事を終つて帰る人、残つて法味を交し合う人、和らいだ法雨の日も漸く暮れようとしています。木村無相さんを囲む長崎の人々はともに本願寺前の詰所へ帰られる。又四国や神奈川の数人はここに一夜を過すことになり、就寝まで話し声が続いた。

毎年思うことだが、秋の一道会は報恩講であり好き人の仰せに機法一体のお念仏が海綿に水の滲むように、腹のどん底にしみわたる念佛の新しい年の始めである。

私もいよいよ年老いてきた。この世の最後が何時訪れるかわからぬ。自分の死期が自分で判らぬ、愚の骨頂であるが、愚なりとも自覚出来ない。

どうか来年の一道会にも命長らえて遭えますようにと老耄の身を何処へともなく仰ぎ、且つ伏す気持で訴えるのである、念ずるのみである。

(昭和五十一年一月一八日稿了)

誓願の不思議に 助けられるばかり

松 村 繁 雄

私の近所に天下の名勝「秋芳洞」がありまして、そこにはメクラのウナギがおりますが、ウナギはメクラであるけれどメクラであることを知りません。闇の自覚もなく、まして光明を知りません。ただ水を飲んでヨロヨロと泳いでやがて死滅して永劫の闇路へ消えて行きますが、それを恐ろしいとも、悲しいとも知りません。

このウナギに教えられました。私は人間に生まれて居りながら、ただほしい、おしただけで、今日が無事ならそれを仕合せと思うて、明日は消える露の命とも知らず、又何処へ行くのかも知らずに居ながら「チエがある」と思うてウツラウツラと日を過しております。

「たとい榮華榮耀にふけりて思う様のこと成るというとも、ただ五十年乃至百年のうちのことなり、もし只今も無常の風来たりて誘いなば、如何なる病苦にあってかむなしくなり果てなんや」とは常々拝読して居りながら、夢を夢と知らず、ただ夢の幻の樂しみを求めて狂奔して、それがメクラの迷いであることを知りません。口では「夢の世

思えば、私はいつも／＼如来様に呼ばれております。何処でも如来様に撰めとられております、そこに私が念仏させていただけなのであります。私は今、このメクラのウナギに等しい煩惱具足のメクラのままで、如来様の明るい御智慧と、広大な御慈悲の心光に護られて往生成仏させていただくのであります

本願力にあいぬれば 空しくすぐる人ぞなき
功德の宝海みちみちて煩惱の濁水へだてなし

私は今まで、死後のすくいとばかり思うておりましたが今現に、み仏の光明に浴して、み仏の智慧と慈悲の充ち満ちた、功德の宝海に生れさせていただけなのであります

慈光はるかにかむらしめ ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまう大安慰を帰命せよ

仰げば遠い御恩でありました。御誓願の不思議なお力で汲めどもつきぬ法味をいただき、御恩の深重をよろこばせていただけるのも、大安慰者、み仏の善巧の御かげであります。枯木に花の不思議であります。

○

私は今年七十九歳の春を迎えさせていただくのであります。七十九年、お世話になりし天地の、高さ広さよ、

初日は昇る。

だ」と言っても、内心ではその夢を奪い合うて勝った、敗けたでうつつを抜かしております。いつも身びいきな心があって、自分に都合の悪い無常は無視して、それをうけとれません。

こうしておれが／＼とのさぼるだけであります。和讃に無明煩惱しげくして塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは高峯岳山にことならず

とありますが、それこそ私の姿でありまして、無智無明の有様は、メクラのウナギと全く同じであります。

○

このメクラのウナギの私を「どの手にしても仏の世界に生まれさせてやるぞ」と、十劫かけて、誓うて、願うて、拜んで下さるのが如来の本願でありました。この誓願の不思議なお力に助けられて、今、念仏の花を咲かせて下さるのであります。

智慧の念仏することは法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせばいかでか涅槃をさとらまし

今、光明の広海にみ仏の願船に乗せて頂いて浮かばせてもうてみれば、その高いこと、広いこと、誠に広大無辺の世界であります。

腰かけた石を拜んで遍路立つ

遍路さんは、しばし腰かけた路傍の石を拜んで立つと申します。いわんや七十九年も腰かけさせてもらって、しかも、如来様が永い／＼間おそだていただいたこの娑婆を、一日一日と立つて行くのであります。山にも川にも御恩、寝るも起きるも御恩の中、一日一日を拜み拜んで立たせていただくばかりであります。

○

明日は散る露と思えば、散らぬまに、とどめおかまし
彌陀のひかりを

一期一会の人生であります。それだからこそ、ともに、俱会一処のみち、念仏の大道をたどらせていただきたいものであります。

貧者の一灯として一文を書かせていただきました。

合掌

念仏詩抄

木村無相

信を得たら

長松曰く

信を得たら

ありがたい者になろうと

思うたら

わが身の悪さがありたけ

知れました

信というのは

照らすもの

悪いを悪いと

知らすもの

ありがたい者

如来さま

わが身はネコソギ

悪い者

追い立てて

追いかけて 追いかけて

追いたてて

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

お手あげ

一蓮院師仰せに

われらは

弱き基(こ)うちなり

阿彌陀さまは

強き基うちなり

とても勝負に

ならぬなり

うたがえるだけ

うたがって見たが

はからえるだけ

はからって見たが

勝負にまけて

ナムアミダブツ――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

気がゆるんでも

香樹院師仰せに

これ一つ聞きつけずば、

おくまいの心がゆるんだら

ホトケになる種失うた

とおもえ――

気がゆるんでも

捨ておかれんが

如来さま――

若生者不取正覚

若生者不取正覚と

追いかけて 追いかけて

ナムアミダブツは

お手あげの声

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

今の呼び声

明信老師御示談の時

さあどうじゃ

今の呼び声が

どう聞こえるぞ――

今の呼び声

今の呼び声

今の呼び声

ナムアミダブツ

称えるときも

称えぬときも

いつでも

いつでも

呼びどおし

墮つるわたしを

呼びどおし

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

バカリ

香樹院師仰せに

“撰取して捨てずとある

大悲のオマコトが聞こ

えてみれば

助かりたいがいらす

堕ちまいがいらす

なろうがいらす

ただ実言のオハタラキを

あおぐバカリ——”

実言のオハタラキ

ナムアミダブツ

ただ念仏を

いただくバカリ——

往生は一人々々のしのぎ

「自照誌」で西元宗助先生が紹介された、身心障害児の養護施設での感話があった。それは副校長の述懐である。

「療育園を訪ねて来られる人々が、障害児を見て、可哀想とか同情するといわれるが、ご本人は無意識であるけれど、相手を見おろした差別意識、優越感がある。むしろ大切なのは自己変革であり、園児と一緒に頑張って園児に教えられて行く事である。例えば障害児はよくころぶところがある。するとすぐ可哀想にと抱きおこし勝ちであるが、これでは園児が何時までたっても自分で立ち上れない。そこで、園児がころぶと自分も一緒にころんで、その園児の前で立ちあがって見せる、これを繰返している」と、園児もやがて自分で立ちあがりはじめた。

或時、箸はもとよりスプーンも握れないで、誰かに食べさせて貰わねばならぬ児があった。そこで、児の前で犬猫のように手を使わないで直接お皿に口をもって食べて食べて見せた。すると児もそれを早速見習って自分で皿から食べはじめた。そこで自分で自由に食べることの

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

仏法と相模とは

あるひと曰く

“仏法と相模とは

上手（うわて）と

組み合わねば

所詮がない——”

ありがたい

ありがたいと

とりまかれて

妙好人がつていては

所詮がない

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

花田正夫

喜びを知った。それをたよりにして手先きの訓練をはじめ、どうにか自分で食べられるまでになった……」

大体以上のような話であった。

それについて思い出されるのが、臨済禅の高僧、白隠禅師の逸話である。禅師が初夏の朝、寺内の池に茂っている蘆の茎に一匹のトンボの蛹が這いあがって、脱皮しようとして難儀していた。あまり苦しそうなので禅師は手を貸してそれをたすけ、羽根ものばしてやってどうにかトンボらしくなったので、大空に向けて放してやった。ところが飛ぶことが出来ないでバタバタと地におちた。夕方に見ると哀れにも沢山の蟻の餌食にされていた。

このことを聞いた寺男に話されると、その老人も同じ経験を持っていた。そこで禅師は自分は間違っていた、あの生れ出る苦しみを経て、トンボに力がつき、大空を自由に飛ぶことが出来るのに、可哀想になど思って、いらぬ世話をしてトンボを殺してしまった。さて省みるとこの寺に集ってくる多くの雲水達にも同じ間違った世話をして、ひと

り立ち出来ぬ、依頼心の強いなまけ者をこしらえていた、まことに申訳のないことをしたと大いに慚愧されたという話である。

更にまた、東京の動物園の飼育係の人の実話であるが、ライオンが子を育てぬのでそれを引き取って育てていると、犬や猫のように幼いライオンがジャレてまつわりついで来る。しかしこうして可愛がるのが本当にライオンのためによいとは思えない。本来の野獣の性としては精神に山野を走り廻って、自分で獲物を捕って自活している、そこに百獣の王のたくましさがある。こうして毎日餌を与えられて、時々狭い檻の中をクルクル巡るぐらいで、あとは寝そべてばかりいると、親のライオンまでが家畜化され、飼育者の顔色を見るようになり、その本性を喪失して、悲しいことには、子を産んでもそだてようとしなくなる……」

以上のことに耳を傾けたのも、親鸞聖人の歩まれた信の姿に心うたれてゐるからである。聖人の常の仰せに

「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」

れて、そのすべてをたすけんと思召し立って下さった御本願を随喜されている。

聖人は對他の上では、弟子一人も持たず候、とか、小慈悲もなき身にて有情利益は思ふまじ、とか、父母孝養のためにとて一遍も念仏申したること候わず、とか、ものを憐み悲しみ啼くむとも、思うが如くたすけとぐること極めてありがたし、……この慈悲始終なし、と自分の持ち合せの慈悲心の限界をよく仏光照護の下に知り尽くされている。

このようなあさましい身が何処までもお見捨てのない大悲大願にたすけられて行く、そのまんまが自然に万人の救いになつて行くのである。

無慚無愧のこの身にてまことの心はなけれども

彌陀の廻向の御名なれば功德は十方に満ちたまう

と、あだかも光も熱もない月が、太陽の照り返しをうけて、我々地上の者に月光と輝いて、暗い夜道を照らされるにたとえられる、その一切の光源が太陽のせいであるように、いずれの行も及び難い、虚仮不実の身を照らして下さる仏光が、そのまま他の人々をおさめて下さる、そのすべてが彌陀仏の願力のひとり付きよと渴仰されて、かつ慚愧し、かつ感謝せられている。

又、親鸞一人がためと仰言る聖人の御心中には、広大な

とある。何時でも何処でもそして誰れにでもくりかえされた言葉というものは、その人の本来の面目である。

この仰せによつて、文殊菩薩（仏の智慧の象徴）に導かれながら五十三の善知識を歴訪される善財童子の求道物語を思い併せる。そこには子供も船頭も医師も、バラモン僧も、遊女も暴君も、更に天体の様々のものやら、終りに近づくと、お妃や母堂も善知識と拝んでいられる。言葉を換えていえば、人生万事の上によき教をうけられて成仏への旅を続けるのである。そのまんま釈尊の八十年のお歩みを象徴されたものであるといわれておる。釈尊は有縁のあらゆる事象から教えを見出されて、それが解けて行くましま、あらゆる人々の救いが招来されているのである。仏はあらゆる衆生を度して、しかも度すところなしと經典にあるのもこうした消息である。釈尊の自利がそのまんま利他と自然にひらけているのである。

再び親鸞聖人の上に眼を転じると、親鸞一人がためと、あらゆる業縁の上に弥陀仏の無碍の願心を仰がれている。有名な王舎城の悲劇の一切の登場人物、五逆のアジャセ、仏に背くダイバ、愚痴のイダイケ、悲劇の王ピンバシヤラ、仏弟子ギバ大臣等々を、権化の仁（にん）と拝まれて、一人一人のそれぞれの業報の中に、さるべき業縁のもようしにあらうと御自身の上にあらわれて来る業報を感得さ

仏縁によつて、十方善惡の衆生がおさまつており、過・現・未にわたる一切衆生と結ばれている。わが弟子、人の弟子と争う世界は、相対有限な衆生縁によるつながりであるから、やがて空しくなり、利害得失によつて、集散離合勝手次第と崩れて行く。ひとり絶対無限の仏縁による心と心の交流は、時と所を超え、生き死にを貫ぬいて障えるものがない。

大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速かに無量光明土に到つて大般涅槃を証し、普賢の徳にしたがうなり、知るべし。

とは、聖人の信の旅姿である。そこに仏力一つに全托されて悠々と歩まれ、悪あがきも、微塵のりきみ心も見られず、その時、その場で無窮の善巧摂化をこうむられながら、無碍の一道をたどつていられるのを拝する。

最近、社会々々という声は高いが、それでは何が自分に社会のために出来るのかと省みる時、集団の陰にかくれてしまふ。そして集団エゴが暴力をふるうている。これは戦中の全体主義で個人を無視されたと殆んど同じである。個人の殻に閉じることの非は、全体、集団の枠の中で個人を無視する暴と同列である。

聖人の仰言る一人は、そのまま一切人がおさまる。個に

徹して他がそこに含まれている。一切人の業報の上にそ

がれる大悲を御自身の中に見出され、御自身の煩惱罪業に

そがれる大悲を仰がれては、地上のあらゆる人々が仏光

の外にある者はないと確信されていたのである。

〇

と、心憎いまでに自利他利の一致、自信即教人信の妙趣を

讃仰していられる。

白井成允先生のお歌に

天地にみつるとこよの大きな道をあかさねがいただ一筋

に

とも、

みほとけのみちかいひろしみひかりのいたらぬところは

世になかりけり

と、自利利他円満の仏光の広大無辺いたらぬ限のないの

を渴仰されている。あまた何をか語り、何をか加えんや

である。



ともしび

聚墨生

今生夢のうちのちぎりをしるべとして来世さとのまゑ

(唯信抄)

この世は夢とよく聞くが、先年卒業五十周年の記念写真

を郷里の友から貰ったけれど、音信不通で半世紀すぎると

昔の友の面影と現存のそれとが結びつかない。遠ざかれ

うとんじ、離れると忘れるというこの世の鉄則のきびし

さに啞然とした。なお肉親の縁も、師弟のちぎりも、友情

のきずなも、利害や愛憎の荒浪に断絶されるし、たとえ

く親和している間柄も、無常の嵐にあえなく消されてしま

う。

こうした相対界を脱して、幽明境をことにしても、心と

心がしつかりと結ばれるには絶対の根柢に立たねばならぬ

武者小路氏の「君は君、我は我なり、されど仲よき」と

いう色紙があるが、境遇も性格も異にした者が、それぞれの

道をたどりながら、しかも互に心が通い合うには、人間の

相対的な善悪、愛憎を超えた広大無辺の基盤に立つて、

はじめて自然にひらけるし、そうでないとバラバラで終ら

ねばならぬ。

父上の遺言で恩讐の彼方の光明を見出された法然聖人、

あなたがわたしになるころ

と、仏心が徹到して、凡心と一味にとかされる喜びをた

たえている。

天台の伝教大師の歌には

鷲の山、高根にのみとおもひしに、わが立つ^{そま}杣に、有

明の月

とある。仏心を外に仰いで、われわれの手のととかぬ、

高いところとばかりとへだてていたが、豈はからんや、賤

しい自分をお照らし下さるとは！と驚喜されている。

匍う力もなく、泣くことしか知らぬ 児に、食物を母は

口うつしにして与えて下さる。善悪の煩惱にしばられて、

身動き出来ぬ、嬰兒同様の私どもに、仏は大悲の御手をさ

しのべて下さるのである。この御手がなくては一日一刻も

身を全うすることは出来ない身としらされる。

(五一・二・一日)

不治の病氣を自覺してにわか心眼の開かれた人、逝く人

も送る者も同一念仏に支えられて浄土に手を結ぶ者等々、

そこには久遠の睦みがある。「盗人にとりのこされし窓

の月」とは、心を真如の法界に遊ばした良寛さんの澄みき

つたほほえみであろう。(五〇・十二・十四日。)

〇

諸仏如来はこれ法界の身なり、一切衆生の心想中に入

りたまう。

(観無量寿經)

私どもは平素、親を外にばかり眺めているが、何かのき

っかけから自分の内に一緒に下さる親、一つ身になって

共に喜び、共に悲しんで下さることを知らされ、かつ恥

じ、かつわびずにいられなくなる。

私の少年の頃の正月に、遠くに住む兄のために母が陰膳

をすえていた。そんな無駄事と笑って見ていたが、私が

大連に赴任した正月、ふと故郷の母は私のために雑煮をす

えていてくれるんだな！と思った時、熱いものが胸にしみ

た。

篇信者、浅原才市さんのうたに、

わたしのところ、あなたのところ

あなたのところが、わたしのところ

わたしがあなたになるのじゃないが



あとがき



五十年來の信友、橋本大巖さんの危篤の電話をうけ、お見舞にも行けぬままに、終日机前に坐して編集を続けています。いよいよ春寂寥の感が身にせまるばかりであります。

今はただ語らんとして言葉なし。六字のうちに関いつこたえつ

足利浄円師詠

本月号に「法蔵誌」の大正九年発行の中から近角先生の一文を頂きました。何事も業報と、業報まかせでは救いはない、その隅々まで見て無限の大悲をそいで下さるところに光がさすことを注意して下さいました。

福島先生の一文は「親心」の至極をとおりし仏心のまことをお教え頂きました。お信仰の至極はまつしぐらに走る子を親にかえされるところにあると御自身の御体験をもとに述べて下さいました。

宮地さんの追悼の文には切々と私共の身にせまるものが伝わり、私自身よき師にめぐり遭わせて頂きながら聞きもらした金言の多いのを省みさせられました。

神原さんの一道会の記を終り、今秋の十月三十一日の一道会が待たれますことであります。

木村さんは、身体の許す限り、有縁の同朋を訪ね、文字通り一期一会の御縁を尊く結んでおられます。それにくらべ落戸を閉じてぼそぼそと閑居する身を恥じております。

五月に入ったのに不順の天候続きで、今朝ほども一寸寒いので早朝に目が開き、寒い寒いと思いがたにフット念仏が浮かび、ああそうだったなあ！この世は寒いからとてわざわざ苦労してこしらえて下さった真綿入りの暖かい念仏の着物を行李にしまつていて申しわけなかったと、一入念仏の催しにあずかった。又この世は煩惱に障えられて暗いからお念仏の提灯を渡して下さい、いるのにそれに火もつけずまどいづまつていることの愚かさを知らされて飛びおきました。南無阿弥陀仏、々々々々。

△御案内▽

○ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。

市バス、新郊通り一丁目下車。

東入る三筋目左入る。

地下鉄、新瑞橋下車。

近鉄呼続下車。

○ 又はもと笠寺下車、市バス乗りつぎ。

○ 毎月二十四日、午前午後。

昭和区小坂町、教西寺法話会。

市バス、御器所通り下車、又は北山下車

定価 半年 七〇〇円 (送共)
一年 一四〇〇円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七